鳥居と社殿がピカピカに☆☆

　懸案だった百里稲荷神社の鳥居と社殿の塗装ですが、「一般社団法人 百里の会」の活動の一環として、有志の方々の協力を仰いで完成させることができました。４回の作業の様子を紹介します。

９月１５日（日）　青空の下、心地よい風が吹く中、平和公園で鳥居の塗装作業を行いました。前回（９月１日）組んだ足場は台風１５号の強風にも耐えてくれました。７人でまずは錆や汚れをこすって落とし、次に動噴を使って水洗いして、乾くのを待ち１回目の塗装を行いました。見違えるようにきれいになりました。

９月２２日（日）　心配された雨にも降られず、予想外の青空の下、５人で鳥居の２回目の塗装作業を行うことができました。前回（９月１５日）に鳥居の下塗りを行い、今回は仕上げの２度目の塗装でした。光り輝くほどではありませんが、見違えるように光沢がでてきれいになりました。

１０月５日（土）　台風の影響か、はたまた地球温暖化の影響か、１０月というのに真夏日となった、百里平和公園には、日射しは強いものの心地よい風が吹き、８人で鳥居の塗装作業用の足場を解体しました。朱色の鳥居が青空にとてもよく映えます。その後、百里稲荷神社の社殿の塗装作業に取りかかりました。昼休みを挟んでの塗装作業でしたが、丁寧な塗装作業が必要な部分も多く、用意したペンキも無くなってしまったために、残り半分程度を残してこの日の作業は終了となりました

１０月２０日（日）　茨城県も含めて東日本に甚大な水害をもたらした台風１９号ですが、幸い百里平和公園は大きな被害を受けずに済みました。基地内のＦ２戦闘機用サイレンサー（エンジンテスト用の構造物）の工事現場では、仮設宿舎が横倒しになっていましたから強風が吹いたようですが。

　やや東風の強い日でしたが、５人の参加者で前回やり残した百里稲荷神社の社殿の塗装を行い、ほぼ完成させることができました。朱色にお色直しをした社殿は見違えるように綺麗になりました。

百 里 の 会

第６号　2019年11月15日

一般社団法人
百里の会
茨城県水戸市見川 5-127-281
Tel/Fax 029-251-2806
E-mail hyakurip@gmail.com
HP　https://hyakurip.web.fc2.com

手記は語る！ その2　百里の長老・高塚惣一郎さんの思い

土地は絶対に手放さねえ

1950年代の百里農民の生活と基地誘致、反対闘争の開始

1　百里開拓農民の生活

(1) 干ばつの時の生活

農業共済制度ってのがあって若干の保障があったけえれどな、まあ到底収穫に匹敵するところの何分の一しか、そういった保障はないという状態でな。干ばつの被害を受けなかった作物の収入とか,豊作の時の貯蔵、そういうもので生活してたわけです。豊作の時とれた陸稲は保存するわけだな。一部な。これは常襲干ばつ地帯としてはそういった事は非常に重要な問題で、そういうもの多く持ってるちゅうことは、農家の誇りっていうような事だったす。誰それさんではもう3年間の米持ってるなんてのが、非常に農家の誇りだったわけですな。収穫の間際になってね、収穫にはまだちょっと間のあるやつを刈り取るとねえ、「奴、米なくなったんじゃねえか」なんて軽蔑されたもんです。どうしても足りないときは買って食べるとか、その当時まだ配給制度があったんでね、そういうの申請して配給をとったということすな。

(2) 昭和28～29年の状況

その頃になるとオレの家でも中学校なんか終わった子どもが、まあ働き手ができたってわけだな。そんで家畜の数なんかも多くなって、養蚕っていうような仕事も取り入れてきたと。その頃、乳牛5頭もってたけんど、近所の人も2頭ずつ飼ったけどな。いずれもあまり成果あがらなくて、ほとんどやめたっていうようなわけでな。こりゃ失敗だったすな。酪農も10頭以上もたなきゃ成立しないんではないかな。まあ養蚕はよかったけれどな。こりゃ価格が安定してたと、それからオレの家は女の子が多かったので,養蚕の作業というのが女の働き手に非常に向いているという関係もあってな。それに養蚕取り入れたのは、娘の結婚の準備ですか、そういうのに自家生産の織物なんかも作ってみようというような目的もあったすな。だけんど結局、乳牛とか養蚕導入したっていうのも、その頃どうも干ばつとか凍霜害が多かったからね。干ばつなんかに影響されないものをやろうっていうことだったすな。そんでもその当時、年間収入はそういいうのをひっくるめても60万位の収入しかなかったすな。もちろん自家消費なんかその他にありますがな。まあ一般的に農家の収入というのは、そんなところでねえすか。三桁農業って、百万収入のある人、これ優秀な農家でな、農業の指導機関もこれを指導の目標にしてたわけだね。そういうわけで収入なんかもおいおい多くなってきたけれども、まだどうにも、なんとなくその頃にも貧乏っていうものがつきまとっているような気がしてな,大変だったわけです。

2　基地誘致の動き　1954年夏

(1) 基地誘致の噂

昭和29(1954)年の夏頃からどうやら百里さ基地ができるっていう噂がボチボチ立ち始めた。入植者の一部と町の議員が接触したとか、そういう噂的なものだったが、なかなか確認する方法もなくて,役場あたりさ問い合わせてみたが、どうもそういった事実がないとか、我々全然知らないとかな、結局うすとぼけてたけどな。実際のとこ、つかめなかったすな。だがそういった噂が広まるいっぽう、米軍の横田、厚木なんかを中心にした、衛星基地ってその頃言ってたが、そういうものが例えば新潟とか百里、それから浜松とか、何でも5～6カ所できるっていうような事が新聞なんかでも、度々報道されるようになった。昭和30(1955)年になると、百里にできるって事、どうも本物らしくなってきたと。基地は果たしてできるのかできないのか、防衛庁なんかに問い合わせてみたが、別段百里に基地つくるっていう事はない、ただ基地の跡を調査している程度だとかっていうような情報でね。なかなか確定的なことはわからなかったすな。実際、茨城でも友部、鹿島、百里、そういった元飛行場があった所を物色してたわけですね。その当時、百里開拓は他に比べて必ずしも悪いということはなかったすな。鹿島なんか砂地でね、友部にしても開拓の成績そんなによくなかったというわけですな。なんで百里に決定したかというと、その当時の町長幡谷と親戚関係でもある県知事友末ですか、それに当時の代議士、大久保留二郎、そんな奴が熱心に百里に誘致したことが一つあったわけだよな。我々にしては誠に迷惑な話だが。

(2) 幡谷町長が金の力で農民を説得

はっきりと知ったのは町長の口からだ。町長、幡谷仙

三郎から百里の部落で大事な話があるから集まってくれという連絡があったのでな。その時、幡仙と防衛庁の職員2人と町会議員のやつ一人と全部で4人きたす。それで幡仙はこういうこと言ったすな。とにかく基地を百里方面に作る.鹿島とか友部を物色したが、どうも百里がいいだろう。百里は見る通り開拓地で、元の飛行場で、表土を削られて地力が非常に劣っていると。で、開拓者の生活は入植以来十年過ぎてもまだ畳の上の生活もできない。電灯もない。入植当時植えた松も大人の膝の高さ位しか伸びていない。作物のできも悪くて小麦の種一斗まいて一斗しかとれないと。こういう状態でいたんではどうにもなるまいと。基地として土地を提供すれば、300万前後の金も払おう。金がないからお前たちは百姓やるほかないんだと。汗を流した土地だとかそういうことを言っているからお前たちは馬鹿なんだ。金があればそういう割の悪い百姓やんなくてもいろいろ他に商売いくらでもあんだ。お前らどうだ。世の中一にも二にも金だと。頭をたたかれたってもうかればいいんだと。こういうこと言ったす。その時、百姓やってようが貧乏していようが余計なお世話だ。町長に金貸してくれっていっていかねえとかな。そういう悪態をついて撃退したわけです。

その時、靴なんか、誰かにおっぽかれちゃって町長ら裸足で逃げて帰ったという話聞きましたな。町会議員の奴は道路通れなくて、田んぼの中なんか通って逃げ帰ったそうだ。

幡仙という奴は、人生のすべてが金、金のために生きてる人間だと思うすな。なんと情けない野郎だと思った。人間としていくらか欠けてるとこがあんじゃねえかなあ。幡仙から言えば我々は人間の中に入んねえだろうけどな。

(3) 絶対に屈服できねえ

海軍航空隊時代に土地を没収された時は、国のためだと、死んだ人もあんだからとそういうふうに考えたけどな。土地を失った農民の悲惨さが身にしみてわかったわけだ。火災なら土地は残った――土地を失った悲惨さを考えたわけす。

いろいろ方法はあると思ったよな。土地がなくなってもさ。よそへ行って土地を買っても百姓はできるわけだ。あるいはより以上にできるかもわかんねえ。そうやるとね。今度は土地出せ！　今度は帰ってきて食料増産しろ、また土地出せ！　そう繰り返していたんではね、床の間の置物みたいにな。都合でそっちさ持って行かれこっちさ持って行かれしたんではな。人間の値打ちを自分で放棄するみたいでな。そういつまでも言うこと聞いていたんでは人間として認めてくれない。土地を出せ！

食料を出せ！　金を出せ！　今度は命を出せ！

ってことになると思うんだ。ここで屈服すれば、再び戦争だから。赤紙1枚で子どもや孫がひっぱっていかれるということだと思うんだよな。絶対に屈服できねえってことだな。

だが営農振るわない開拓者も少なくなかったわけで、開拓者の半数位の人が半年間位のうちに、たちまち土地を売り渡したっていうような事態が進展したわけです。その当時、闘争の方法もよくわかってないし、外部との接触もあまりないのでな。ただこりゃ、とんでもない話だと思っていたすな。

3　「同盟」を結成し、反対闘争へ

(1) 農地接収反対同志会

基地誘致の話があると、橘、元橘、百里めいめいに「農地接収反対同志会」ってな組織作って、チラシを作って、マイクを持って街頭に出たんだな。チラシ作るのには、小学校や農協が協力してくれてな。自転車の後ろに拡声器縛り付けて、行った先で電源借りてきて、いろいろしゃべったんだな。「敗戦の困難を乗り越え、営農を確立しつつあるんだ。土地は絶対に手放さねえ」てな内容だったがな。こんなの聞いてた連中は「どうも百里の連中の気持ちはわかんだが、何を言ってんだかわかんねえ」って思ってたな。

その頃、効果があったのは「親子ラジオ」なんだよな。隣部落に親ラジオがあって橘には拡声器だけあったんだな。連絡用に大変強力な武器だったんだな。

＊町議会、防衛庁ともに表面的な行動はとらず。しかしそれは反対運動の退潮を待つための一時的なポーズであって、この間に同志会内部より、脱落者も出、少数の開拓者は裏面工作に加わった。このような状況の中なので、農民相互に不信が芽生え、不安におののく人も多かった。これらの不安を鎮めるのに親子ラジオは有力な武器となったもの。

(2) 「百里基地反対期成同盟」の結成

いろいろあった組織を統合して昭和31（1956）年の9月10日に「百里基地反対期成同盟」の結成大会を開いたすな。70戸位が参加したな。オレは副委員長に選ばれちまって、結成大会では、反対闘争のそれまでの経過報告をさせられてな。マイクで話すってのは、街頭でやった以外、初めてだったでしょ。百里以外の人もたくさん来ているから、あがってしまって、何しゃべったか覚えてないが、とにかく「祖先から引き継いだ土地、自分が開墾した土地は、より立派にして幾分でも広くして子孫に引き継ぐ義務があんだ。ある農民が、通りかかった田んぼを見て『この田は元オレの家の田だったが、おじいさんの頃貧乏して売ったんだ』と言うように100年過ぎてもそういうこと忘れないでいるのが、農民の耕地に対する愛着なんだ。そういうものだから、国の施策に従って土地を国に渡すわけにはいかない」とこんなこと、し

ゃべったな。

(3) 支援団体

基地闘争始まる前に、常東農民組合の人なんかも来たが、全然相手にしなかったんだよな。基地の話が出ると、様々な方面から団体が入り始めたんだが、そういった人たちとの交際もなかったんで、どういうものだかわからなかったんだな。例えば共産党とかいうものは、一種のこわいものだったんだな。そんな人らと交際するなどとんでもない話だとな。そんで、共産党の人たちが来たときに、菜種畑の中に入って隠れていたといううような話もあったわけです。そんでも反対同盟ができる頃になると、いろんな団体が入るようになってきたので、そんなこともなくなったがな。

とにかく最初のうちは、闘争の進め方なんか、支援団体の人たちの言いなりでしたな。オレらには、どうしたらいいかわかんなかったからな。社会党の代議士の西村力也さんや青柳盛三さん、それに地元選出の森元治郎さんなんかもよく来てな。最初のうちは「この人らが来てくれんだから、勝てんだねえか」と思ってまあ頼りにしてたわけです。とにかく話がうまかったからな。だけど結局、代議士の言うようには、うまくオレらは闘えなかったんだよな。大会があってもうまくしゃべれないし、文も下手くそだったからな。

(4) オルグ

それぞれ違った組織から、絶えず何人かのオルグが来てたわけだな。オルグの人らは決まった宿泊所もないので「野ばらの家」に泊まったり、農家を泊まり歩いてたりしてたな。闘いの方針なんかは、どうしてもオルグが中心になって話し合われたから、その人らの泊まる家にはどうしても人が集まるわけだな。それが煩わしかったので、オルグはあまり歓迎されなかったな。

オルグの人らのやったことってのは、自衛隊ってのは憲法違反なんで、それは憲法第九条に「戦力は持たない」ってはっきり書いてあるからだとな。まあこんな話は何度も詳しく聞いたな。それから家宅捜索、逮捕、取り調べの時には、どうしたら良いかとかな。「黙秘権」なんての教えてもらったな。それに農業専門家を呼んでの講習なんてのもやったな。とにかく何をやるのにもオルグの指導を受けたってわけだ。だけど同じ人は長くても1年ぐらいしか百里にいなかったから、親密感ってのもあまり生まれなかったな。それにオルグ同士は連絡も取り合わないので、道ですれ違うと口喧嘩したりしてな。オルグ同士の対立が農民にも反映してな。

(5) 砂川闘争に参加

砂川の実力闘争に参加することになったのは特に砂川から要請があったってわけではないんだな。砂川の人が百里に来てくれて、その直後だったわけだな。「実力闘争あんなら百里としても行かなきゃならねえんじゃねえか」という話が出て、「百里の団結じいさん」って呼ばれていた清水屋のじいさん(藤岡二郎)とオレの二人で行くことになったわけだ。清水屋のじいさんは、和服を着て尻をはしょって、急造した「百里基地反対期成同盟」ってタスキをかけて行ったわけだ。

砂川へ行ったらとにかくびっくりしたな。おびただしい数の赤旗。それから機動隊って奴を初めて見たわけだな。普通の警官の服装とはまた違う乱闘服を着て長い警棒を持っててな。「とにかく、こりゃただごとじゃない、大変な所に来てしまった」と思ったな。しかし逃げ出す訳にもいかんしな。結局座り込みをしたが、こりゃ肝を冷やしたっていうか、生きた心地がしなかったな。地元の農民と一緒に座り込みしたんだが、体を杭に縛り付けたりして、とにかく真剣な表情をよく覚えているな。女の人や子どもまでそりゃ真剣な表情していた。

まあ着いた1日目は衝突もなくて、夜は米俵にくるまって、中学校で寝たわけだ。2日目は「こんな所にいたら大変な目に遭う」と思って、とっとと帰ってきてしまったんだな。

当時砂川からはいろいろ教わったな。まず「砂川では勝ったんだ。オレ達だって勝てねえことはねえ」ってことだ。今考えてみれば、百里と砂川では条件が違っていたと思うんだが。例えば、砂川の方がはるかに動員力でまさっていたとか、交通の便も良い、東京に近いとかな。だけど当時は「砂川にできて百里にできねえことはねえ」と思ったわけだ。

それから今オレがやってる桑苗の作り方も砂川からものなわけだ。百里も砂川も「土地に対する愛着」ってことでは変わりがないってこと思ったな。それと「何で農民はこんなにいじめられなきゃならないのか」ってことな。

今考えるんだけど、砂川闘争ってのがもしなかったとしたら、百里闘争もなかったんじゃねえか。砂川闘争がなかったら、百里でも基地が短期間のうちにできてしまった、今頃は徴兵制度なんかもできてたんじゃねえか、あるいは戦争なんかも起きてたんじゃねえかな。

(6) 五の日の会合

当時「五の日会合」っていって5日と15日と25日に定期的に集まって会合開いたわけだな。防衛庁側が流すデマ、例えば「誰それは土地売った」とか。こんなのを聞くと農民同士疑心暗鬼になるわけだ。そういったことのないように、あらゆる情報を持ち寄って、疑問な点は究明するとな。こりゃ闘争進める上で効果的だったと思うんだよな。ま会合で話されることが、そこに集まった人を通して防衛庁側に流れるという逆効果もあったけどな。